

筑後国府跡

—第287次発掘調査報告—

平成29（2017）年10月
久留米市教育委員会

序

久留米市内各地には貴重な歴史遺産が多数存在しており、本書で報告する筑後国府跡もその一つです。今回の調査は、共同住宅建設に先立つ発掘調査として、平成28年度に実施したもので、平安時代の溝や柱穴などが出土し、貴重な成果を挙げることができました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成29年10月31日

久留米市教育委員会
教育長 大津秀明

例　言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち [] 氏の委託を受けて実施した、筑後国府跡第287次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は久留米市教育委員会が主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の廣木誠が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、廣木と藤木幸子・中村麻衣が行った。また、本書に掲載した遺物の実測及び図面のデジタルトレースは、廣木が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、全景写真を有限会社空中写真企画が6×6判で撮影し、その他を廣木がマミヤRB67を用いて6×7判で撮影した。また、遺物写真はニコンD700を用いて当課の西拓巳が撮影した。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はTKH-287、調査番号は201620である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 本書の執筆・編集は廣木が担当した。

本文目次

I. はじめに.....	1
II. 筑後国府跡の立地と概要.....	2
III. 調査の記録.....	4
IV. 総括.....	11

I. はじめに

i. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成28年7月17日、[REDACTED]氏より、久留米市朝妻町字三丁野1429-1、1430-11における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。一帯は周知の遺跡である筑後国府跡に含まれ、当該地は平成14年度に実施した第181次調査地の東側に隣接する。周辺の調査成果も含め、照会地は筑後国府Ⅲ期政庁内にあたることは明らかであったため、発掘調査が必要である旨を回答した。その後、協議を重ね、調査費用を原団体負担とし、平成28年11月8日に[REDACTED]氏から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成28年12月2日に[REDACTED]氏と久留米市長橋原利則は「筑後国府跡第287次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。

現地調査期間は、平成29年1月10日から2月21日までである。また、出土品整理・報告書作成作業は平成29年5月1日に「筑後国府跡第287次調査報告書作成委託契約書」を取り交わし、実施した。報告書作成期間は平成29年5月1日から10月31日までである。

ii. 調査に係わる体制

調査委託：[REDACTED]

調査主体：久留米市教育委員会 教育長：堤 正則(平成28年度)

大津秀明(平成29年度)

調査総括：市民文化部 部長：野田秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

次長：竹村政高(平成28年度)

西村信二(平成29年度)

文化財保護課 課長：馬場博文

課長補佐：白木 守

山崎万里子

主査：水原道範

事務主査：塚本映子 豊福早苗

庶務担当：豊福早苗

調査担当：廣木 誠

整理担当：米澤美詠子 宮崎彩香

発掘調査臨時職員(平成28年度)

高尾春代、田中樹子、中村麻衣、藤木幸子、二村智治、丸山幸、迎直樹、由布幸子

渡辺しげ子、渡辺やつ子

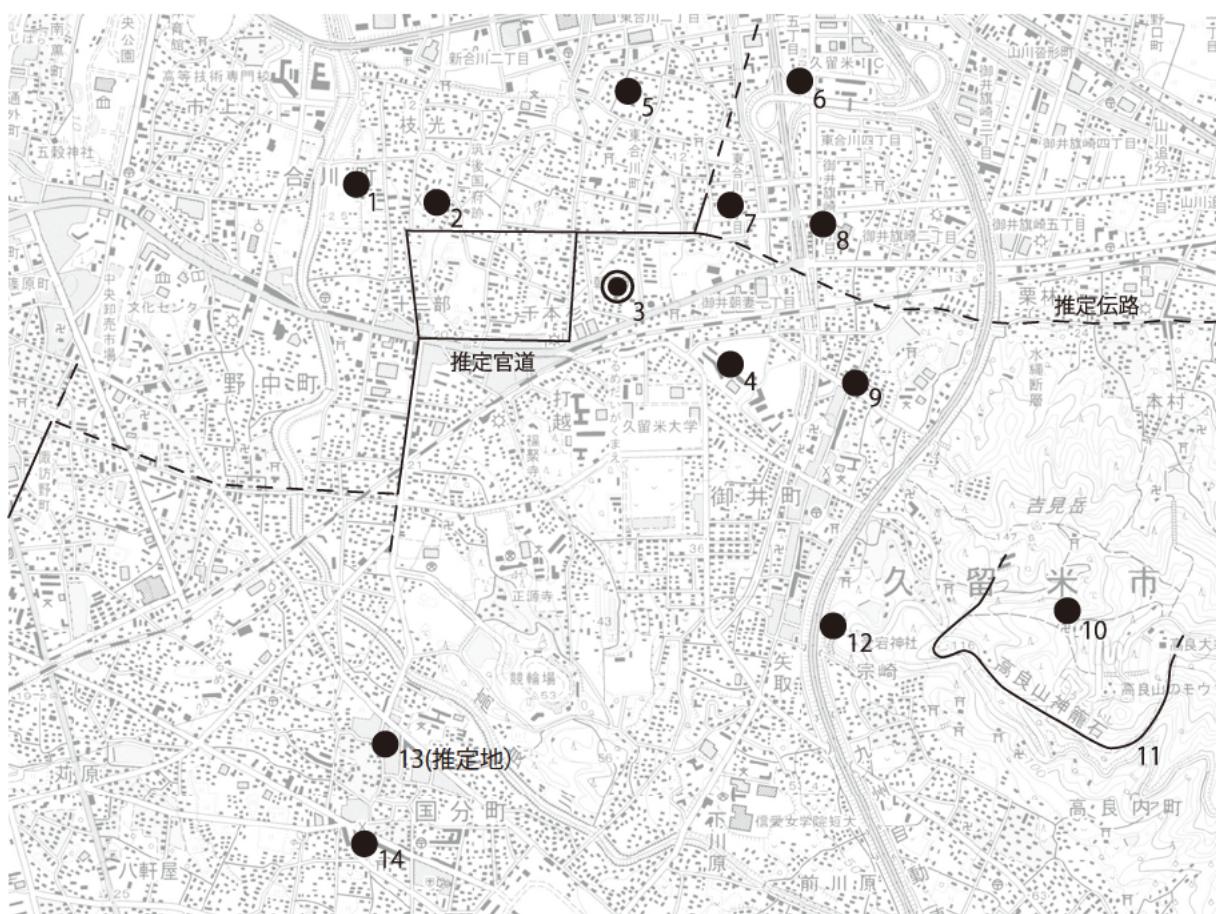
発掘調査整理臨時職員(平成29年度)

山口由季子

II. 筑後国府跡の立地と概要

i. 地理的環境

久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑紫平野の中央に位置する中核都市で、交通の要衝にある。筑後国府跡が所在する合川町付近には九州自動車道をはじめ、国道210・322号やJR久大本線などの交通網が発達している。久留米市域の北側には水を湛える九州一の大河、筑後川が西流して有明海へと注ぎ、南東側には緑豊かな耳納山地が聳える。筑後国府跡はこの耳納山地西端から北西へ派生する標高約15mの低位段丘上に立地し、東西約1.0km、南北約0.7kmの範囲に展開している。台地の南端は水縄断層系千本杉断層が東西に走り、断層によって形成された断層崖下には湧水地が点在する。これらの湧水は小河川となって台地を開析しつつ筑後川へ及ぶ。また、西端は高良山南麓に源を発した高良川が、東側は中谷川が流れ、北の筑後川、南の断層崖とともに国府域の四至を画す。国府の選地にあたっては筑後川の水運と地理的立地の利便性に起因しているものと考えられる。



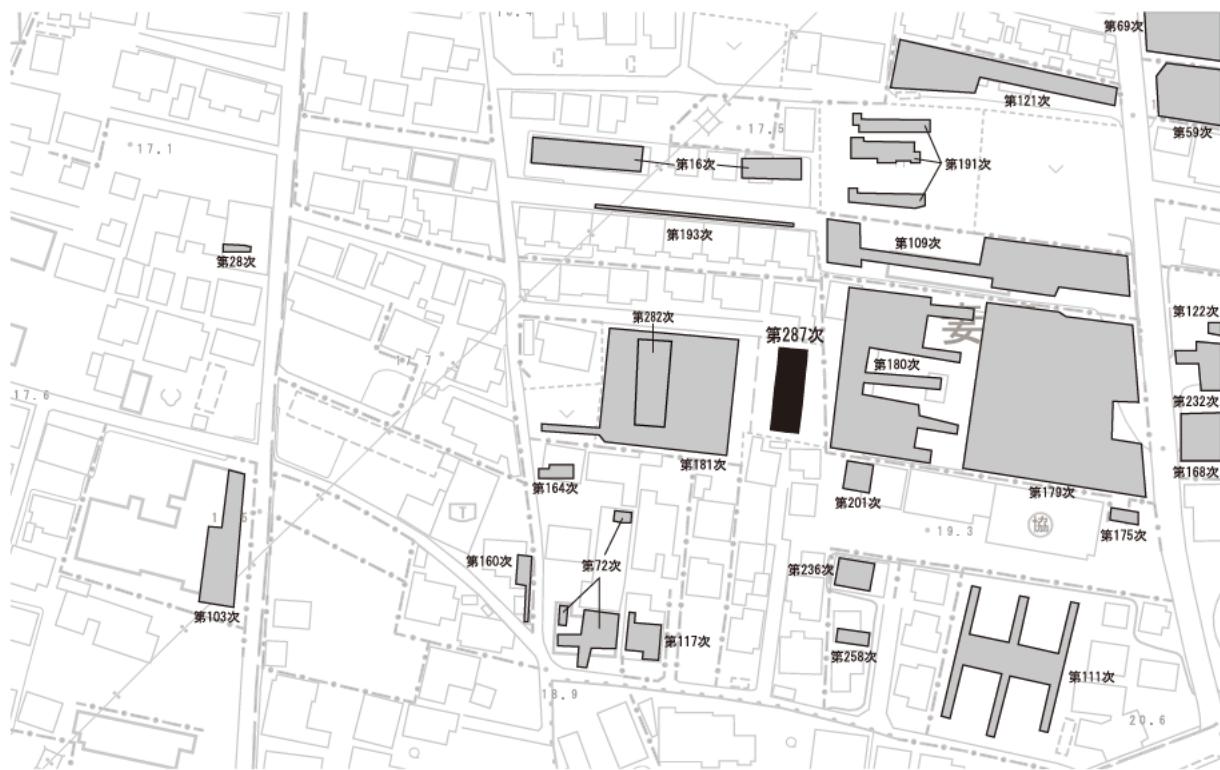
第1図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

- 1. 筑後国府I期政庁
- 2. 筑後国府II期政庁
- 3. 筑後国府III期政庁(第287次調査地)
- 4. 筑後国府IV期政庁
- 5. 西小路遺跡
- 6. 下見遺跡
- 7. ヘボノ木遺跡
- 8. 神道遺跡
- 9. 二本木遺跡
- 10. 高隆寺跡
- 11. 高良山神籠石
- 12. 祇園山古墳
- 13. 筑後国分尼寺跡
- 14. 筑後国分僧寺跡

ii. 筑後国府の概要

筑後国府跡の発掘調査は、昭和36年に実施された九州大学考古学教室による調査に始まる。以降、半世紀を超える調査の結果、筑後国府跡の具体像が明らかになりつつある。特に、筑後国が成立する以前から「前身官衙」が設けられたこと、筑後国が成立した7世紀末頃から平安時代末の12世紀後半までの約500年間で御井郡内を3度移り変わったことは注目される。

筑後立国以前の7世紀中頃、「前身官衙」が田代地区に造営され、大型の四面廂建物を中心に枝光台地西部に展開し、大溝や土壘を伴うことが判明している。7世紀末頃には、古宮地区において築地塀で囲繞された掘立柱建物群からなるⅠ期政庁が造営された。8世紀中頃になると、古宮地区から東へ200mの阿弥陀地区に政庁が移転した。この政庁をⅡ期政庁とし、9世紀前半には礎石建物であったことが明らかとなっており、また、西脇殿や政庁前面の朝集殿的な建物群、築地塀、多量の古瓦も検出されている。この時期、付属官衙群が枝光台地一帯に広がり、各官衙は単位毎に計画方位をもって造営される。特に、Ⅱ期政庁から南東へ200mの位置には、9世紀代の国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に焼失したと考えられ、東へ600mの朝妻地区へ再び移転する。Ⅲ期政庁は一辺140m程の大溝で区画された大規模なもので、北に八脚門・東西に陸橋部を配し、区画内部に正殿・脇殿を設けていた。付属官衙群もこれに併せて移転したと考えられ、政庁の東側を中心に多数の官衙群が確認されている。さらに、11世紀末になると、Ⅳ期政庁として南東へ400mに所在する横道遺跡へ移転し、『高良記』に見える「今ノ符」と考えられるこの政庁は、12世紀後半頃まで存続したようである。



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,000)

III. 調査の記録

i. 調査の目的と経過

調査対象地は、国府域の南東に位置する朝妻町三丁野地区に所在する。三丁野地区では、本調査を含めて29次に亘る調査が実施されている。その結果、東西に陸橋部、北に八脚門を構え、一辺約140mの溝で囲繞された内部に正殿・脇殿と考えられる大型の掘立柱建物を配したⅢ期政庁の様相が明らかとなってきており、10世紀中頃から11世紀後半に存続したものと考えられている。

調査地は、平成13年度に実施した第180次調査地の西側10mに、平成14年度に実施した第181次調査地の東側15mに位置する。第180次調査では正殿を、第181次調査では西第2脇殿等をはじめ、それらに前後する時期の掘立柱建物・溝・土坑などを検出した。このことから、本調査地は、Ⅲ期政庁機能時には空閑地であったこと、また、Ⅲ期政庁造営前および廃絶後の遺構が展開することが予想され、これらの確認を目的として調査を行った。

現地調査は、平成29年1月10日から重機による表土剥ぎを開始した。表土を除去した部分から遺構検出及び平板測量を実施し、略図作成が終了した調査区南側より遺構の掘削を開始した。遺構実測、写真撮影は隨時行い、2月16日には調査区の全景写真を撮影した。補足調査終了後の2月21日に埋め戻し、機材撤収を行い、全ての現地作業を終了した。土層断面図（1/10）は手測りで作製し、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんcubic」で編集・保管している。



第3図 筑後國府跡第287次調査区全景（東上空から）

ii. 検出遺構

対象地の現況は畠地であり、周辺地形は南東から北西へ緩やかに傾斜している。このことから、特に標高が高い調査地南側において、造成時の削平が懸念された。表土剥ぎの結果、一部に搅乱が認められたものの、遺構検出面は比較的良好に残存していた。

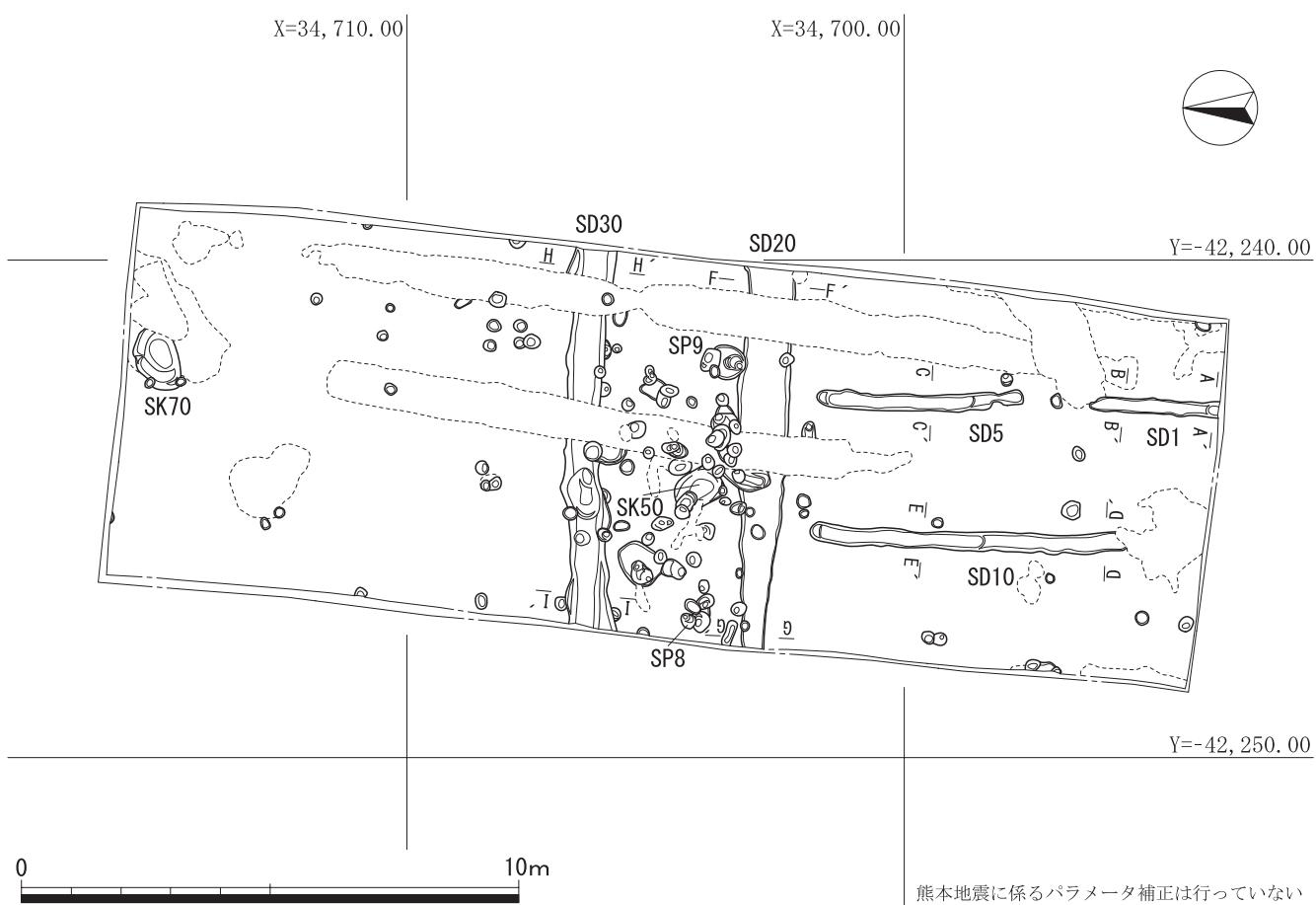
基本層序は、調査地南側では耕作土（15cm）下位に灰色を呈する間層（10cm）が認められ、黒色の遺物包含層（5cm）を経て、遺構検出面である地山に至る。調査地中央、北側も同様の層序を示し、中央は耕作土が15cm、間層が15cm、遺物包含層が10cm、北側はいずれも20cmを測る。検出面の標高は南側で17.9m、北側で17.6mである。

検出した遺構は、溝5条、土坑2基、ピットで、遺構は調査区中央に密に分布し、北側と南側は希薄である。以下、主要遺構について詳述する。

溝

SD1（第5～7図）

調査区南東部で検出した南北走行の溝である。走行方位はN - 3° - Eを測る。検出長2.6m、幅0.3mで、深さは南端が8cm、北端が3cmを測り、底面レベルは北方へ緩傾斜を成す。埋土は黒灰色土の単層で、にぶい褐色ブロック土を含み、よく締まる。埋土内から遺物は出土しなかった。



第4図 筑後国府跡第287次調査遺構配置図（1/150）

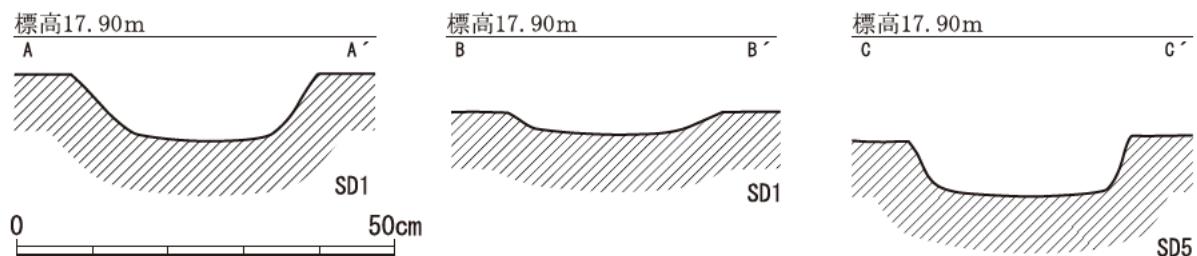
なお、本遺構は後述するSD5と埋土・規模が類似し、走行方位も等しいため同一遺構の可能性がある。また、SD10も諸要素が近似することから、SD1・5を東側側溝、SD10を西側側溝とする幅2.4m程度の道路状遺構の可能性が考えられた。しかし、遺構検出時には明解な硬化面を確認できなかった。また、全景写真撮影後に断面調査を実施したが、地業痕跡等は検出されなかった。



第5図 SD1 B—B' 土層（北から）



第6図 SD1 完掘状況（南から）



第7図 SD1・5 断面図（1/10）

SD5（第7～9図）

SD1の北側延長上1.5mで検出した。走行方位はN - 2° - Wである。検出長4.2m、幅0.3mを測る。深さは南側が3cm、北側が7cmで、底面レベルは北方へ行くに従い比高を減じる。埋土はにぶい褐色ブロック土を含む黒灰色土で、締まりはやや悪い。埋土内から遺物は出土していない。



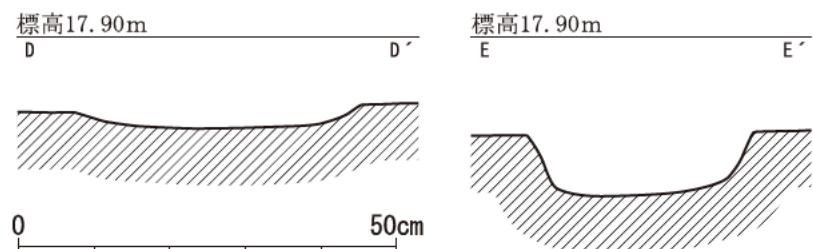
第8図 SD5 C—C' 土層（北から）



第9図 SD5 完掘状況（北から）

S D10 (第10~12図)

調査区南西部で検出した南北走行の溝で、S D 1・5の西側2.5m程に位置する。走行方位はN - 2° - Wを指向する。検出長6.3m、幅0.3~0.4mで、深さは南側が3cm、北側が8cmを測り、北方へ緩やかに傾斜する。埋土は黒灰色土の単層で、にぶい褐色ブロック土を含み、締まりはやや悪い。埋土内からは土師器の坏1点、細片4点が出土したのみである。



第10図 S D10実測図 (1/10)



第11図 S D10E-E' 土層 (北から)



第12図 S D10完掘状況 (北から)

S D20 (第13~15図)

調査区中央で検出した東西走行の溝で、第180・181次調査で確認した溝 (180 S D10) の延長部に当たると考えられる。検出長は7.6m、幅は東側で0.9m、西側で0.45mを測る。深さは5cmと浅く、底面レベルはほぼ水平である。埋土は黒灰色土の単層で、やや締まった土壤である。埋土内



第13図 S D20F-F' 土層 (西から)

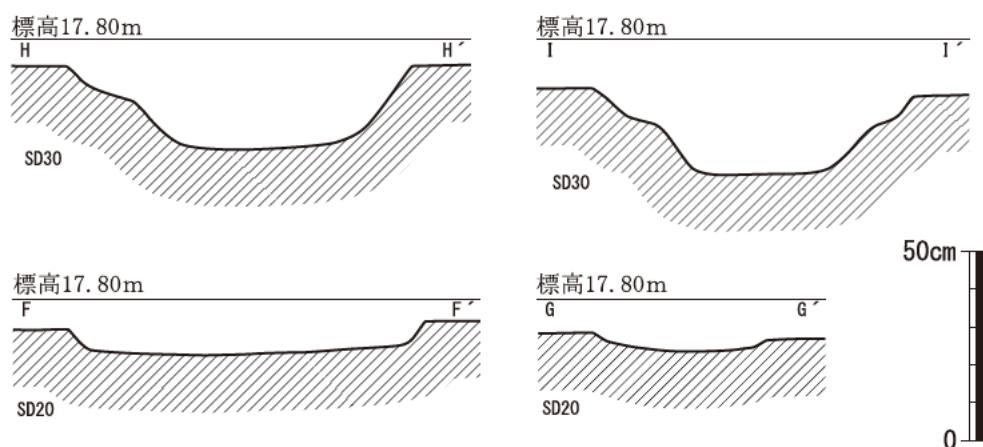


第14図 S D20完掘状況 (西から)

からは土師器の
壺片 5 点、甕片
2 点が出土した。

S D30 (第15
~17図)

東西走行の溝
で、 S D20 の北
側 2.8 m で検出
した。本遺構も
第181次調査で



第15図 SD20・30実測図 (1/20)

検出した溝の東側延長部に当たると考えられる。検出長は 7.6 m、幅は東西両側が 0.9 m、中央部が 0.6 m である。深さは 20 cm を測り、底面レベルはほぼ水平であった。埋土は黒灰色を呈し、締まりはやや悪い。埋土内からは土師器の皿・壺・塊・甕、黒色土器 B 類の細片、須恵器の甕、砥石が出土した。なお、土師器皿片の内 1 点には、底部処理に糸切りが見られる。



第16図 SD30 I—I' 土層 (東から)



第17図 SD30完掘状況 (西から)

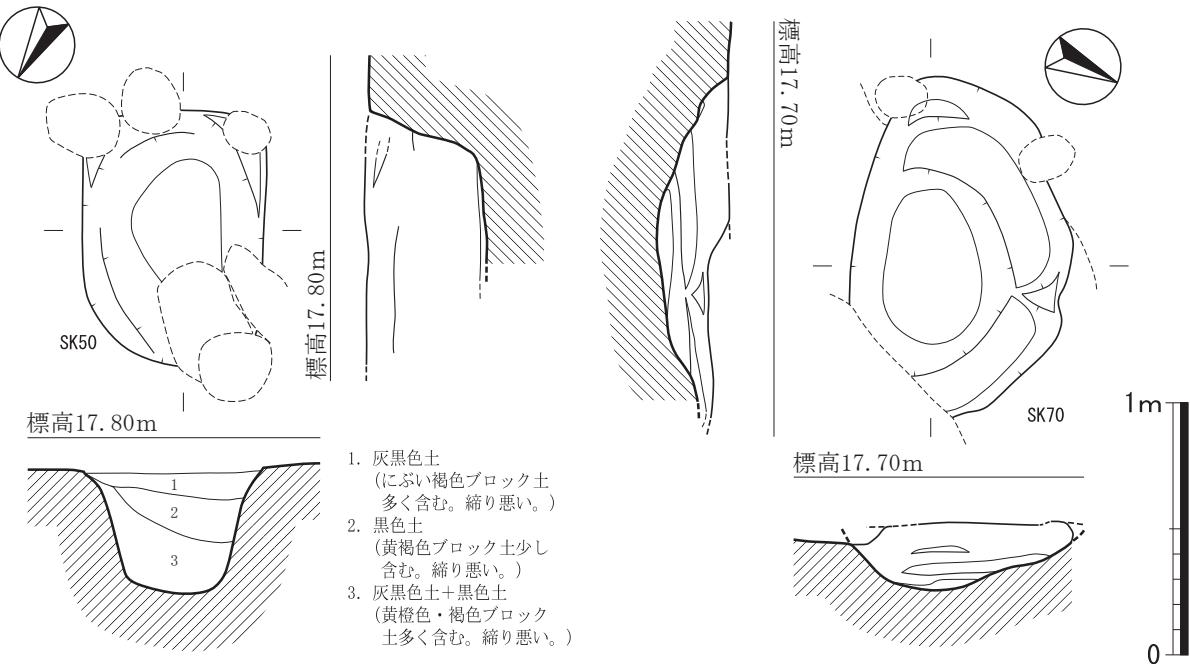
土坑

S K50 (第18・19図)

調査区中央、 S D20 の北側 0.5 m で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長 1.0 m、短軸長 0.7 m、深さ 48 cm を測る。底面断面形は凹レンズ状で、壁面は外傾して立ち上がり上端に至る。埋土は黒色を基調とし、ブロック土を含む。いずれも締まりは悪く、東側から流入した様相を呈する。埋土内からは土師器の壺片 2 点、甕片 1 点が出土したのみで、所属時期は特定できない。



第18図 SK50完掘状況 (北西から)



第19図 SK50・70実測図 (1/30)

SK70 (第19~21図)

調査区北側で検出した。全体的に攪乱を受けている。平面形は倒卵形で、規模は長軸長1.3m以上、短軸長0.85m、深さ30cmを測る。底面断面形は凹レンズ状を呈し、北側には複数のステップが認められる。埋土はにぶい褐色ブロック土を含む暗灰色土で、よく締まる。埋土内から遺物は出土していない。



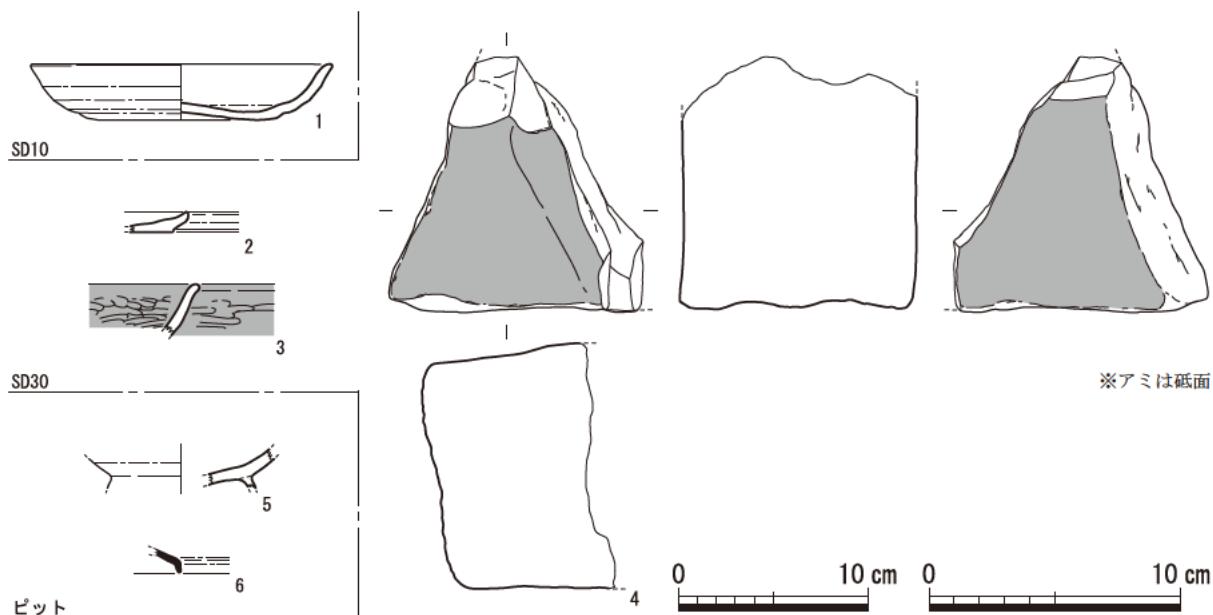
第20図 SK70土層 (南東から)



第21図 SK70完掘状況 (南西から)

iii. 出土遺物

今回の調査は、遺構密度が希薄であったため、出土遺物は少なく、総量は小袋5袋に過ぎない。土師器が大半を占め、その他には黒色土器B類片が2点、須恵器片が4点、石製品が1点のみである。遺物の詳細については第1表を参照されたい。



第22図 出土遺物実測図 (4 : 1/3、その他 : 1/4)

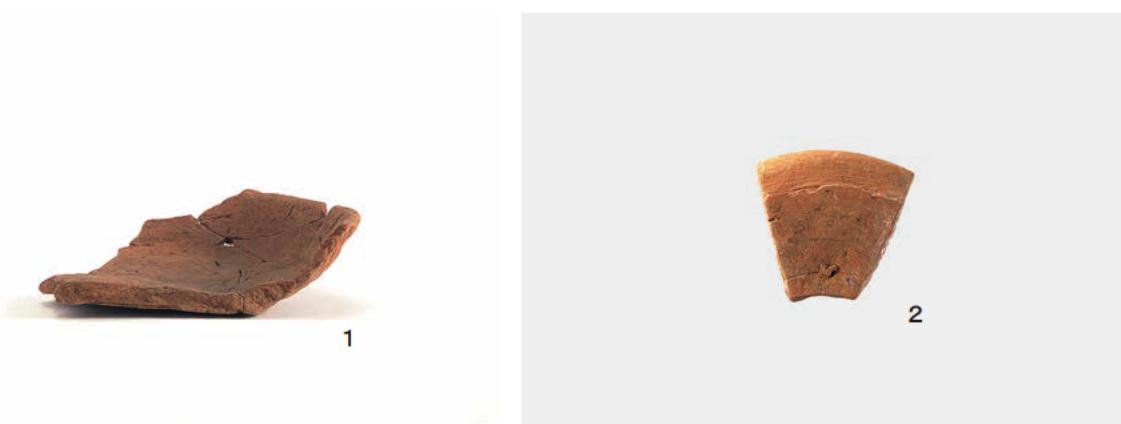
第1表 出土遺物観察表

遺物No.	出土 遺構	種別	器種	法量			色調		調整		胎土・石材	備考	登録番号
				口径 長	底径 幅	器高 厚	外面	内面	外面	内面			
				[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]			
1 第22・23図	SD10	土師器	壺	[15.7]	[9.6]	3.0	にぶい 橙	にぶい 橙	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ナデ ナデ	細細粒(雲母) 砂粒		201620 000003
2 第22・23図	SD30	土師器	皿	—	—	(1.05)	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	細砂粒(雲母)		201620 000005
3 第22・24図	SD30	黒色土器 B類	塊	—	—	(2.7)	黒	黒	回転ナデ ミガキ	回転ナデ ミガキ	微砂粒		201620 000004
4 第22・24図	SD30	石製品	砥石	(10.1)	(10.0)	9.7	—	—	—	—	凝灰岩	重さ 1.29kg	201620 000011
5 第22・24図	SP8	土師器	塊	—	—	(1.6)	橙	にぶい 黄 橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒(雲母・黒色粒子)		201620 000001
6 第22・24図	SP9	須恵器	蓋	—	—	(1.35)	灰白	黄灰 暗灰	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒(白色粒子)		201620 000002

遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

・口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存値を、〔 〕内の数値は復元値を示す。色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。

・遺物登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。



第23図 出土遺物写真①



第24図 出土遺物写真②

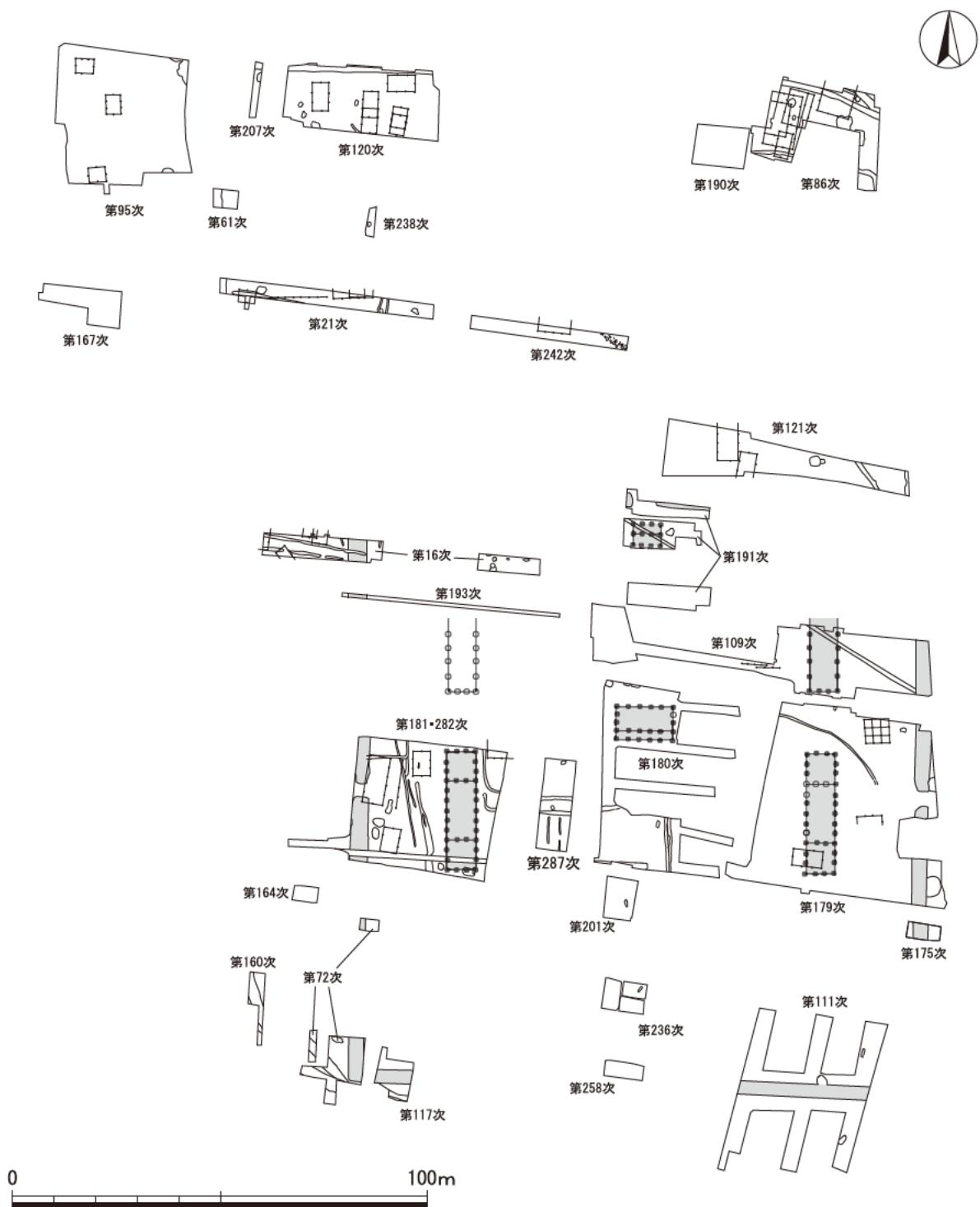
IV. 総 括

本調査地は周辺の調査成果から筑後國府跡III期政庁内にあたり、政庁機能時には空閑地であることと、当該期を前後する遺構が展開していることが想定され、これらの確認を目的として調査を実施した。検出した主要遺構は溝5条、土坑2基で、政庁機能時の遺構は確認されず、調査前の想定通りの結果となった。既述のように、主要遺構から出土した遺物は極めて少なく、詳細について言及し難いが、検出遺構について若干の整理を行うとともに、周辺状況を概観し、総括としたい。

S D 1・5・10は南北走行の溝で、主軸方位・埋土の特徴が類似する。このため、一連の遺構と想定され、南北走行の道路側溝の可能性が考えられたが、地業痕跡や硬化面は確認できなかった。所属時期は、S D 1・5は不明、S D 10は12世紀の所産と思われる。S D 20・30は東西走行の溝で、第180・181次調査で検出された溝の延長部と考えられる。いずれも、西側は第181次調査地点で北方へ走行方位を変え、S D 20はL字状を呈し、S D 30は第181次調査区外へと延びる。区画を意図したものであろうか。所属時期はS D 20が不明、S D 30が12世紀である。なお、土坑の詳細については明らかにし得ない。

三丁野地区における12世紀以後の遺構分布状況は、掘立柱建物（第86・179・242次調査）、溝（第179・180・181次調査）、土坑（第121・179・191次調査）等が確認されているが、その密度は薄く

散在的に分布する。この状況は、東に位置する朝妻地区とは対照的であり、本地区が中世頃の内容を伝える『高良記』に記された「在国司居屋敷」の西側にあたり、屋敷地の範囲外であるためと考えられる。本調査では検出遺構は希薄であり、出土遺物も少量であったが、このことは周辺状況と同じように、12世紀以後には屋敷地外であったことを示唆しているものと思われる。



※アミはIII期政府機能時の主要遺構

第25図 三丁野地区主要遺構模式図 (1/1,500)

報告書抄録

ふりがな	ちくごくふあとだい287じちょうさ							
書名	筑後国府跡第287次調査							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第388集							
編著者名	廣木 誠							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2017(平成29)年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 だい じちょうさ 第287次調査	ふくおかんぐるめし 福岡県久留米市 あさづままち ほか 朝妻町1429-1他	40203	30112	33° 18' 43"	130° 32' 46"	20170110 ～ 20170221	171m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第287次調査	官衙	平安 不明	溝 溝 土坑	2条 3条 2基	土師器 須恵器 石製品	筑後国府Ⅲ期政府内の調査		
要約								
第287次調査地は筑後国府Ⅲ期政府内にあたり、正殿の南西20m、西第2脇殿の東20m程に位置する。このことから、政庁機能時には空閑地であったこと、また、当該期を前後する遺構が展開していることが想定された。調査の結果、12世紀代の溝2条、時期不明の溝3条、土坑2基、および8世紀代のピット等を検出し、調査前の想定通りの結果を得た。								
土木工事の届出日	平成28年7月17日			遺物の発見通知日			平成29年2月27日 (28文財第1672号)	

